

I 自己評価

I 評価結果 黒字は評価項目 赤字は達成 青字は未達成(改善事項)

項目	成果と課題(達成状況)	評定
学力の向上	<p>○「学びのサイクル」の具体化と見える化・徹底と確認。→ユニバーサルデザインの視点を生かした授業改善に努めた。特に、授業の流れの板書、発問の工夫、振り返りの工夫を行った。</p> <p>○効果的な場面で、ICT機器やタブレット端末の活用を軸に、興味や関心を持って授業に取り組むことができるよう、授業展開を工夫する。→キャンバ(ソフト)の活用やユニバーサルデザインの視点を生かして、視覚支援等を行った。生徒は、クロムブックを道具の一部として使用し、集中して授業に取り組むことができた。しかし、ゲーム等不適切なタブレットの使用をする生徒も見られた。</p> <p>○※ICT を日常的・効果的に活用して主体的・対話的な深い学びを実現できる生徒を育成する。個別最適化な学びの実現。学びの自立。AIドリル navima の活用。→生徒は、クロムブックを日常的に活用し、学習に活用している。教員は、個々に応じた学びの方法を提供し、個々のレベルに応じた課題や問題を生徒に与え、提出もクロムブックから行うようになってきた。生徒も自分に合った学習の方法を取り入れている。しかし、教員が一对一で支援をしなければならない生徒もいる。それらの生徒は、集中力が続かず、周りに不適切な言動を取ることがあることもある。</p> <p>○意図的な協働学習を効果的な場面で取り入れ、議論や発表を充実させる。活動を充実させる。→どの教科の教員も、ペア学習やグループ学習を日常的に取り入れ実践している。生徒も安心して、わからないことをわからないと言う事が言え、教え合い学習を取り入れて大変良い雰囲気での学習ができている。一方、自分が、今すべきことを理解できない生徒にとっては、私語や不適切な活動をする事で興味が惹き、授業妨害をすることもある。</p> <p>○授業に繋がる家庭学習の在り方を模索し、学習習慣の習慣化を図る。家庭学習の内容の転換。→生徒個々のレベルに合わせた課題や問題を出し、学習の方法も一律にすることなく、クロムブック、ワークブック、教科書、プリント等から自分に適したものを選び、学習させるなどして工夫している教科もある。しかし、自ら課題を考えて解決する学習までは至っていない。生徒は、家庭でユーチューブ、ティックトック、インスタグラム等をよく視聴し、ゲームも行うが、これらも広義で言えば家庭学習の一環に当てはまるかもしれない。狭義の家庭学習の時間は、年々減少している。(岡山県、津山市も同様である。) 学習習慣の定着は厳しい。ぱっちりもぐもぐの基本的な生活習慣向上の取組(学習時間、睡眠時間、ゲーム時間を用紙に記入し、自分で時間調整をするための取組)を学期ごとに行っているが、スマホやゲームの時間は各学年とも大変多い。</p> <p>朝学習や放課後学習や、授業内での小テスト、反復練習を充実させ基礎基本を徹底する。→授業内での小テストや単元テストは、各教科で実施しており、その結果を生徒に直ちにフィードバックし、できていない問題を再度させるなどして基礎基本の定着を図っている。また、学習内容や単元テストの実施のスケジュールを事前に生徒に示すこ</p>	B

	<p>とで、生徒が計画的に何をすればよいのか考え、行動できるように支援している。モジュールを使った基礎基本の定着は、全国・県調査問題から出題し、国語・数学・英語の共通問題を各学年とも取り組んでいる。しかし、学びに向かう姿勢が厳しい生徒もいる。夏の補充教室は、2年生は約半数の生徒が毎日参加した。定期考査前の質問教室も多く生徒が参加している。</p>	
表現力の育成	<p>○授業や宿題の中で自分の考えを80字程度の2文で接続詞を用いて書くなど、次につながる端的で論理的な文章を書く。→各教科で意図的にテーマを決めて取り組んでいる。書くことについては、生徒は苦痛ではなくなっている。クロムブックを活用している教科もある。しかし、全国・県調査の初見の問題では、空欄が多く、最初から取り組まない生徒や、問題に取り組む姿勢も厳しい生徒もいる。</p> <p>○自問清掃を振り返る心磨きノート、授業での振り返りで自分の考えをまとめる。→自問清掃の意義を理解できていない生徒が多い。現状から判断すると通常の清掃活動に戻した方が教育活動に適していると思われる。全く掃除をすることなく徘徊する生徒もいる。人任せにしようとする生徒もいる。しかし、8割くらいの生徒は、そのような生徒を尻目に、ぶれることなくしっかりと取り組むことができている。</p> <p>○※「よむyomuワークシート」を活用した読解力や英語力の向上の取組。→国語科で実施している。問題の意図や解き方を支援している。生徒は、一生懸命に課題に取り組むことができている。英語科のライティング・リーディング・リスニング・スピーキングは定期的に行っている。ALTと連携して取り組んでいる。</p> <p>しかし、英語については、単語力がないために全国・県・自己診断テストなどは厳しい結果となっている。単語の暗記、構文の暗写等も今後取り組む必要がある。</p>	B
規範意識の向上	<p>○授業規律の徹底や積極的な生徒指導と、きめ細かな教育相談を実施する。→授業規律については、各学級とも厳しい生徒がおり、中には、私語や経ち歩き、ごみを捨てる、勝手にクロムブックを使用する、席を替わるなどして教職員の指導を受け入れず、勝手な不適切な言動をする生徒がいる。年度当初よりは、改善されてきた。授業中のトイレも度々行く。その度にTTや空きの教職員で対応するが、50分の授業が持たない生徒もいる。保護者に指導・支援を依頼しても難しい場合が多い。支援のためのケース会議の開催や特別支援ナビゲーターに研修を行ってもらい生徒理解や、今後の対応について指導・助言をいただいた。教育相談は、時間をしっかりと取り、丁寧に生徒の訴えや教職員から気になることを生徒から聞き取ることを行っている。そのことが、いじめ等の未然防止や早期発見、早期対応に繋がっている。</p> <p>○生徒の自主的な活動やピアサポート活動を推奨することで自己肯定感を高め、問題行動等の未然防止に努める。→運動会や高德祭、生徒会活動や学級活動等において自分たちで企画・運営し、成功体験を得た場面も多々あった。また、授業においても教え合い学習や班学習等の協同的な学びを実践することで、生徒同士の信頼感も深まり、特にわからないことを素直にわからないということができ、教える・教えてもらうことが自然に、当たり前に行える環境になっている。一方、要支援の生徒は、不適切な表現でしか自分を伝えることができず、集団の中でもコミュニケーションが適切に取れず、望ましい人間関係が構築できにくくなっている。適切な言動ができるよう指導・支援が必要</p>	C

	<p>である。特別支援教育の推進を欠かすことができない。</p> <p>○久米中学校いじめ問題対策基本方針に沿ったいじめを許さない学校づくりを行う。スマートフォンやインターネットの不適切な利用を減少させる。→いじめ問題基本方針に沿っていじめ防止の取組を行ってきた。生徒会のいじめ防止の放送や、撲滅宣言の取組、ポスターの掲示は自分たちが安全で安心した学校生活を送ることができるように主体的な取組となった。いじめのアンケート、教育相談アンケート、教育相談、生活記録、生徒への注視、観察中の生徒・保護者への支援等を行った。しかし、生徒の人権感覚や意識はまだまだ低く、不適切な言動により傷つけられる生徒もいる。教員は、その場で何が問題であるのか等を指摘し、指導・支援するようにしている。スマホやSNSの不適切な使用については改善に至らない。非行防止教室や情報モラル教室等で自身の利用について振り返らせるが、自分事として捉えきれず、すぐに不適切な使用をしてしまう生徒もいる。学校を超えたトラブルも起こった。少年サポートセンターや生活安全課と連携して対応している。今後は、PTAや生徒会を中心にこの問題に取り組むたい。</p> <p>○学校生活において互いに支え合い、高め合うことのできる生徒を育てる。人を大切に聴くことの徹底。→運動会や高德祭、球技会、修学旅行、職場体験、校外学習等の行事は、企画・運営・実施を縦割り集団や学年集団で生徒が主体的に動くことができるように仕掛けをして、生徒自身が帰属感や達成感を味わうことができた。和らかな人間関係を築くことができた。グッドビヘイビアカードを活用し、自己肯定感を高める取組を行った。支援を要する生徒も集団の中で自分の居場所があり、輝くことができた。職場体験や校外学習においても、地域等の方から誉められ、認めてもらうことで自信を深めた生徒が多かった。反面、人権感覚が低く、不適切言動を繰り返す生徒もいた。「聴くことの大切さ」を理解したり、実践したりすることについては、度々生徒にも説いたが、支援を要する生徒にとっては大変厳しい。</p> <p>○情報交換を密に行い、外部機関と積極的に連携しながら適切な初期対応に努める。→県警察本部少年課、生徒指導推進室、少年サポートセンター、津山警察署生活安全課、津山児童相談所、子ども子育て相談室、家庭裁判所、医療機関、弁護士等あらゆる機関と連携し、情報交換を行い事案に対応し、生徒・保護者に支援をしてきた。適切に対応できたものとそうでないものがないあり、そうでないものは、連携を取っても改善までは至らないことがある。それでもできることを迅速に行い対応した。学校を開き、関係機関の方々に常に学校の生の様子を見ていただき、その生徒・保護者にとって適切な指導・支援の在り方を考えて対応した。</p>	
<p>豊かな心の育成や課題改善に向けた実践力</p>	<p>○道徳の授業の中で、自分事として考えさせる場面を工夫する。→道徳については、生徒が常に自分事として考えることを学学年とも実施している。ローテーション道徳を行っている学年もあるが、生徒は真面目に考え、議論ができています。しかし、実践力が伴わない場合が多い。あらゆる教育活動を通して、道徳的価値を考え、実践する生徒を育てていきたい。</p> <p>○学級活動において学級における生活上の課題について話し合う活動を設定し、決定事項を実行する。→自分たちの学校生活の状況を客観的に捉え、何が課題であるかを判断し、改善に向けて何をいつまで</p>	<p>B</p>

	<p>に誰がどのように取り組むのかを意識して、各学級で取り組んでいる。一学年が2クラスのため、学年で課題を共有し、取り組むことが多い。学級委員や専門委員が中心となり、キャンペーン活動や課題解決に向けた取組を実施してきた。</p> <p>○生徒会活動を活性化し、<u>リーダーの育成</u>と同時に、生徒による自治活動を推進させる。→意図的に生徒会や専門委員の役員に、仕掛けをして、各取組を行った。生徒は、自分たちの学校は自分たちで変えることができ、自分たちで作り上げると意識が芽生えてきた。当初は、仕掛けにより生徒は動いていたが、現在は主体的に自分たちで動くことができるようになってきた。いじめ防止宣言の取組、校則の改定(女子の髪)、イメージアップの取組、球技会の開催、環境整備の実施、しおりの作成等自分たちで企画・運営ができるようになってきた。</p> <p>○ふるさと久米や津山市を愛し、貢献することのできる人づくりのための取組を充実させる。→職場体験、校外学習で、地域の方々の思いや期待感に触れ、生徒は、改めて自分の住む地域を振り返ることができた。活躍する先輩から直接話を伺う機会や大人の方々と意見を交流する機会を持つことも、中学生にとって自分の将来を描く良い機会を提供することができた。</p>	
<p>地域とともにある学校の推進</p>	<p>○HP や各種通信、学校公開(行事を含む)等、あらゆる機会を通して、学校を開く。→HP、ウサギメール、スクリーンで出来る限り情報を発信して、学校の様子を伝え、協働して学校を支えていただくように努めた。参観日は、大変多くの保護者や関係の方々に来校いただいている。学校公開を設定しても保護者の来校は、難しかった。日頃から学校を公開しているが、期間を限定したり、地域ごとに割り振ったりする方が保護者にとっては、来校しやすいのかもしれない。</p> <p>○学校や地域で、子どもたちが外を知る体験活動の機会を更に充実させ、郷土愛を醸成する。つやま郷土学の推進。地域の本物に触れる体験活動。つやま検定の取組。企業見学の参加。→職場体験、校外学習で、地域の方々の思いや期待感に触れ、生徒は、改めて自分の住む地域を振り返ることができた。活躍する先輩から直接話を伺う機会や大人の方々と意見を交流する機会を持つことも、中学生にとって自分の将来を描く良い機会を提供することができた。(再掲)</p> <p>○学校運営協議会を核として、地域と学校がともに教育に責任を持つ学校に変える。「中学生こみゅ」の実施。→「中学生こみゅ」の実施を通して、大人との距離が縮まり、人と触れ合い、意見を交わすことの心地よさを生徒は学習できた。学校運営協議会の委員の方々は、我が事として久米中学校の教育について責任を持って様々な教育活動の支援をいただいている。地域や保護者の方々の中には、マイナスイメージを払拭できず、噂の拡大の原因となっている場合もある。大部分の生徒は、真面目に学校生活を送っている。特定の生徒が校内外で問題行動を繰り返すため、風評被害が跡を絶たない。保護者と連携してもなかなか改善されない場合も多い。</p> <p>○コミュニティ・スクールへの理解を深め、<u>目指す生徒像を共有</u>することで家庭や地域との連携を強める。→<u>コミュニティ・スクールの本来の目的は、学校課題を共有し、その解決に向けて、お互いに知恵を出し合い、実践することで課題の解決を図る事である。</u>本校では、しっかりとそのことが実践できている。しかし、学校だけの力ではどうしても</p>	<p>B</p>

	<p>ないことも多く、地域で問題があれば、すぐに中学校がというように扱われ、いかにも全体が荒れてどうしようもないように語られ、噂され、負のスパイラルに展開していく現状がある。今後の対応を検討する必要がある。</p> <p>○小中連携（ブロック）による学力向上の取組→本年度、ブロックの研修会で松本一郎講師にコミュニケーションや非認知能力の向上について指導・支援をいただいた。中学校では、グッドビヘイビアカードの導入や、授業での非認知能力の育成等に取り組んだ。算数・数学の取組では、事務共同実施が記述問題の結果を分析し、それに基づき、具体的な授業での取組や発問等を共通実践することができた。出島調査官の指導・助言を生かすこともできた。</p> <p>○※学力の小中連携の具体的な取組を明確にし、中学校ブロック全教職員での当たり前の取組を徹底する。（教員の危機感と使命感の高揚）→小中学校での指導・支援の差異を明らかにし、特に特別支援を要する生徒・保護者への対応や支援の仕方について共通理解が必要である。小中学校の教職員間の連携・情報交換を緊密に実施することと、指導・支援の一貫性を構築する必要がある。中学生になると思春期課題も現れ、小学校の時は良かったのに、中学校になると途端に子供が悪くなるというイメージが常に付きまとう。</p>	
--	---	--

（A：目標を上回っている B：ほぼ目標どおり C：目標を下回っている）

## II 分析・改善方策

- ・生徒主体の授業実践、ICT 機器を使った授業改善と学びのサイクルを徹底し、学び直しを行う。
- ・生徒の自治活動をさらに充実させ、自治的実践力の向上、集団づくりと学校づくりを行う。

### 2 学校関係者評価委員会（学校運営協議会委員が兼ねます）

松阪 宏士（学識経験者）	甲元真佐代（主任児童委員）	水島 俊光（健全育成団体）
松本 浩之（町内会）	新家恵津子（主任児童委員）	村上 妙子（主任児童委員）
國米 裕喜（地域学校協働活動推進員）	行部 伸治（PTA 会長）	末澤 雅彦（PTA 副会長）

### 3 学校関係者評価

<p>学校評価アンケートにおいて、各項目とも保護者や生徒からの評価が高くなっているが、果たして、問いをきちんと理解した上での回答か疑問である。</p> <p>「規範意識の向上」の項目は、生徒の校内外の状況から考えると、非常に厳しい評価となる。問題行動等への対応や当該生徒・保護者への支援については、学校だけでは、改善は難しく、PTA や民生委員児童委員等と連携して行うことが望ましい。</p> <p>特別支援を要する生徒への支援は、園・小学校と情報交換を密にして、できるだけ早く医療や福祉に繋ぐことが大切である。</p>
--

### 4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

- 教員が生徒の協働的伴走者としての役割を担う授業づくり、生徒の「個別最適な学び」「協動的な学び」「主体的な学び」のための授業改善を行うために、現状の評価の基、計画的に校内研修を進めたい。
- 9年間を見通した小中連携で、さらに「育ち」と「学び」をつなぐ必要がある。(算数・数学を中心とした教科指導と特別支援教育・不登校児童生徒等を中心とした生徒指導の連携等)
- 家庭学習の充実については、内容の転換を図り、狭義の教科の家庭学習ではなく、広義の生涯学習の分野も含めたものに広げることを推進していきたい。
- ICT活用(1人1台端末含)はより効果的な活用方法を取り入れ、充実させていきたい。県内外のChromebookの有意義な活用の研究を進めたい。
- 新入生の「学び直し」は、大変重要であり、わからないところをわかるようになるための支援をしていきたい。そのことが生徒の進路選択の幅を広げることにつながる。継続してモジュール学習や放課後学習に取り組む。全校テスト(国語・数学・英語)も全国・県調査を意識した問題に取り組ませたい。
- 基本的な生活習慣については、今年度もメディアコントロールに引き続き課題があった。SNS等の適切な使用は、久米ブロックの保幼こ小に依頼し、保護者の方への啓発やスマホ・ゲームのルール作りを徹底して進めたい。
- 生徒が、自己肯定感・有用感・効力感・存在感を高め、自分の適性に合った将来像がもてるよう、学校行事や体験活動等を工夫して行いたい。自分の進路を拓き、社会をたくましく生き抜く力を育むために、小学校・高校・地域等と連携した教育活動を工夫したい。身近な大人と良い出会いをさせたい。
- より体験活動や道徳教育を充実させ、生徒に自己指導能力を身に付けさせたい。規範意識の向上のために生徒自ら現状を認識し、改善できるよう働きかけたい。生徒主体の学校づくりを行うためにも今後継続して校則の見直しを行う。いじめについては、基本方針に沿って取り組み、関係機関等とも連携し、未然防止や適切な対応を行う。
- 「コミュニティ・スクール」は、地域学校協働活動の実施だけではなく、今後も学校課題や教育課題について学校がきちんと運営協議会委員に説明し、課題解決に向けた熟議を行い、学校課題に対応していきたい。  
「コミュニティ・スクール」をさらに機能化させ、「中学生こみゅ」「カフェ」「先輩からのメッセージ」の取組などを行った。今後も、保護者や地域の方々に気軽に学校に足を運んでいただき、学校の実情を知っていただくとともに、保護者や地域の方々と一体となった学校づくりを進めていきたい。現在の中学校の良くないイメージを払拭するためにも「問題行動」「要支援生徒・保護者」「不登校・長期欠席生徒」「部活動の地域展開」の対応について情報交換や対応について熟議を行いたい。